

スプリングステーションのアメリカ：

9.11、引き裂かれたアメリカン・マインド

(9.11 後のアメリカのミュージック・シーン 1)

加藤 隆 治

序

2001年9月11日、この日にアメリカで同時多発テロが発生。あまりにもショッキングな映像がリアルタイムで放映され、さらにそれがテレビなどで繰り返し再生され人々の記憶に大きな爪痕を残した。9.11以降、アメリカは世界の反対を押し切りながらアフガニスタンに侵攻し、さらにイラク戦争へとなだれこんでゆく。この一連の流れの中で、世界の様々な構図・枠組みが後戻りできないくらいに大きく変化したと言っても過言ではない。

その変化の波は、当然ながら音楽界にも大きなうねりとなって訪れた。9.11はミュージシャンにも「世界と向き合う」「現実と向き合う」ことを要求し、今まで以上に自分達が音楽という手段を通じて何が出来るのか、またはリスナーに対して何を語るのか、ということを考えさせる契機になった。結果として、多くのミュージシャンが平和や反戦をインターネットを含む様々なメディアを通じて訴えたり、デモに参加したり、または自らの音楽作品を通じてメッセージを発信していくようになる。

しかし、この9.11以降の状況はベトナム反戦運動の盛り上がった60年代末の状況と大きく異なるのは、反戦・平和、又は反ブッシュというスローガンやメッセージと相反する動きが同時にアメリカ国内に広くそして強く蔓延しているからである。2004年の大統領選へ向けて日本国内での報道は、どちらかとい

うと反戦運動や反戦デモなど反ブッシュ派の動向に偏っていたが、実際には方向性の異なる二つの運動がアメリカを二分するほどの大きなうねりとなっていた。そして、問題はそれが簡単に anti-war 対 pro-war という単純な二項対立に終わらないということにある。言い換えるならば、前述の二項対立に加え anti-Bush 対 pro-Bush という二項対立が加わり、さらに愛国主義という要素が複雑に絡み合うという重層構造になっているからである。それにより、反戦派という大枠でくくることができるミュージシャンも、またはその対極にある pro-war, pro-Bush に属する側も、それぞれの主張にかなりの温度差があるのが事実だ。

このねじれ現象にはアメリカ独特の複雑な背景がある。アメリカ本土が初めて大々的に攻撃され甚大なる被害を被ったということ、そして消防士などのヒーロイックな行動が大きく報道されたことなどがアメリカ人の愛国心に火をつけ、激しい愛国主義が9.11直後からアメリカ国民の間に沸き上がった。さらに、アフガニスタン戦争が始まり軍隊が戦地へと派遣されることになると、軍そのものへのアメリカ人独特のシンパシーが発揮され始めた。この流れは、anti-war 対 pro-war であるとか、anti-Bush 対 pro-Bush という対立の枠を超えて、アメリカ人に自然とわき上がったものである。だからこそ、民主主義と自由を守るための戦いであるというブッシュ大統領が押し進める政策が瞬く間にアメリカ国民のあいだに浸透し、イラク戦争へと突き進んで行く素地をつくり出し得たのである。

本論では、このアメリカの一大事に多くのインスピレーションを受け、2002年7月30日に『ザ・ライジング (The Rising)』というアルバムを発表したブルース・スプリングスティーン (Bruce Springsteen) に注目する。このアルバムはアメリカで初登場一位、200万枚以上を売り上げる大ヒット作となったが、実はほぼ全曲がなんらかのかたちで9.11に関連している。『ザ・ライジング』や言動から彼をどちらかの陣営に色分けすることはできるのだろうか？ 答えはノーである。いや、より正確に言えば、どちらの陣営にも組み込まれてしまう曖昧さを内包しているのが、スプリングスティーンだと言える。つまり、彼

も前述した「ねじれ現象」の中に存在しているのだ。

この論文において、『ザ・ライジング』に収録された曲の歌詞を詳細に分析してゆく。歌詞を分析していくことで彼の主張を明らかにし、anti-war、またはpro-war という枠組みの中に単純に収めることのできないスプリングスティーンの立場、すなわち、現在のアメリカ社会がかかえるねじれた状態をそのまま引きずっている彼のアメリカ人としてのアイデンティティーを明らかにしていきたい。

1. 喪失感と祈り

現在スプリングスティーンは彼の故郷であるニュー・ジャージー州に妻子と共に居を構えている。彼の家は9.11の現場であるマンハッタンからそう遠くはないところに位置し、車で数分走れば、世界貿易センタービルが見えたところにある。また、彼の近所には事件に関係した人がけっこういたらしい。このような彼にとって身近な状況だということも影響していると思われるが、『ザ・ライジング』は彼にしてはレコーディング期間がひじょうに短く一気呵成に作り上げたものらしい。その録音時間は75分を超え、昔のLPレコードの時代であれば間違いなく2枚組の大作と言えるようなボリュームである。また、事件前に既に書かれていた2曲を除いて全てが事件後に書かれ、その事件前に書かれていた曲も含めてほぼ全曲が事件に関係した内容である。また、いくつかの曲では彼が事件の遺族に直接行ったインタビューが元になっている。このような事実を考えるだけで、この事件によりいかに彼のアーティストとしての創作意欲がかきたてられたのか分かる。

アルバムに収録された曲は大まかに以下のようなテーマに分類することが出来る。

- 1 事件により家族を失った喪失感
- 2 事件からの立ち直りを願う祈り
- 3 アメリカとイスラム諸国との分断

これら三つのテーマが微妙に絡み合いこのアルバムが構成されている。ただし、1と2は密接に絡み合い不可分となっているので、まとめてテーマ1とし、3をテーマ2とし、この二つに集約して考えていきたい。このテーマをそれぞれ分析していくとアメリカに対する彼のアンビバレントな感情があらわになってくる。つまり、一アメリカ市民として、傷付いたアメリカとその国民を癒したいという素直な感情の発露と、そうは言いながらもアメリカにこそ問題の根源があり、イスラム教国を攻撃せずに友人となるべく対話する努力をすべきである、という主張が入り交じっている。9.11後の音楽シーンの中でこの両方の立場を歌いこんだのはスプリングスティーンくらいではないだろうか。他のミュージシャンは、様々な温度差こそあれ、どちらかの側に寄り添う位置にいるが、スプリングスティーンはいずれの側にも組みすることがないような立ち位置を選んでいる。これはスプリングスティーンに顕著な特徴である。

まず、テーマ1にあげられるものは以下の曲である(曲の前の数字はCDでの曲順)。

2. 「イントゥ・ザ・ファイヤー ("Into the Fire")」 喪失 (祈り)
3. 「ウェイティン・オン・ア・サニー・デイ ("Waitin' On a Sunny Day")」 喪失 (祈り)
5. 「カウンティン・オン・ア・ミラクル ("Countin' On a Miracle")」 祈り
11. 「メアリーズ・プレイス ("Mary's Place")」 喪失感
12. 「ユアー・ミッシング ("You're Missing")」 喪失感
13. 「ザ・ライジング ("The Rising")」 喪失 (家族の絆)
15. 「マイ・シティ・オブ・ルーインズ ("My City of Ruins")」 喪失・祈り

また、テーマ2を歌っている歌は以下である。

1. 「ロンサム・デイ ("Lonesome Day")」 分断
6. 「エンプティ・スカイ ("Empty Sky")」 喪失感及び分断
7. 「ワールズ・アパート ("Worlds Apart")」 分断

スプリングスティーンのアメリカ：9.11、引き裂かれたアメリカン・マインド (9.11後のアメリカのミュージック・シーン1) (加藤隆治)

8. 「レッツ・ビー・フレンズ (“Let’s Be Friends (Skin to Skin)”)」 分断

9. 「ファーザー・オン・アップ・ザ・ロード (“Further On (up the road)”)」 分断

14. 「パラダイス (“Paradise”)」 分断

以下の2曲のみこのテーマからはずれる内容である。

4. 「ナッシング・マン (“Nothing Man”)」

10. 「ザ・ヒューズ (“The Fuse”)」

「ナッシング・マン」は9.11事件で生き残った警察官または消防士の苦悩を扱っている。主人公は現場から生還しヒーローと扱われることに悩み、自殺を考えている（銃を暗示する“the pearl and silver”という表現がある)¹。この曲はこの論で設定したテーマからははずれるが、次作の『デビルズ・アンド・ダスト (*Devils and Dust*)』のタイトル曲である「デビルズ・アンド・ダスト (“Devils and Dust”)」と同様主人公は理想と現実の狭間で苦悩している。「ザ・ヒューズ」のみ9.11との直接的な関連性を読み取ることが出来ない。違うテーマが見つければ何らかの関連性を見いだせるかもしれないが、現在は分からない。ただしこの曲は、直接的ではないにせよ間接的に9.11との関わりはある。スパイク・リー (Spike Lee) 監督の映画『25時 (25th Hour)』のエンディング・テーマとして使用されているからだ (2002年アメリカ公開)。映画の舞台はニューヨークで、崩壊した世界貿易センタービルの跡地なども映像として使用されている。よって、『ザ・ライジング』というアルバムは、全収録曲のうち「ザ・ヒューズ」以外は9.11との何らかの直接的な関連性がある。

では、テーマ1に含まれる曲の歌詞を検証していこう。これらの楽曲は9.11により家族を失った遺族の苦悩と祈りが描かれている。どちらかと言うと、このアルバムの歌は祈り、希望にあふれている。また、「ウェイティン・オン・ア・サニー・デイ」であるとか、「ユアー・ミッシング」というタイトルからして積極的に何かをしようというよりは「受け身」な態度に感じられるものがいくつ

かある。ただし、9.11後の心境としてはやはりこのようなものになるのではないか。「ウェイティン・オン・ア・サニー・デイ」では以下のような歌詞が歌われる。

Hard times, baby well they come to us all
Sure as the tickin' of the clock on the wall
Sure as the turnin' of the night into day

この惨事をなんとか乗り切ろうとする人の心境がつづられている。同様に「メアリーズ・プレイス」はひじょうに明るい曲調ではあるが、喪失感にあふれた詞になっている。この曲の“let it rain”というリフレインは、雨に全てを流してもらおうという祈りにも似た気持ちを表している。逆に言うと悲しみが深く雨にでももらわないと生きてゆけないせっぱつまった心境ともとれる。

Tell me how do we get this thing started
Tell me how do you live broken-hearted

そして、上記のように、事件から立ち直ることのできない心情が歌われている。この曲と同様に「ユアー・ミッシング」でも、そのタイトルに表れているような喪失感に満ちている。

You're missing, when I close my eyes
You're missing, when I see the sun rise
You're missing

事件によって人々が受けた衝撃をスプリングスティーンは正面から受け止め、その喪失感を余すところなく表現している。どうしようもなくぽっかりと空いたアメリカの人々の心に彼の歌は間違いなく癒しとして響いたことだろう。

しかし、スプリングスティーンはこのように悲しみにくれている姿を描くだけでなく、どうにかしてこの現状から立ち直り新たな生活を迎え新規まき直しとしようというメッセージも同時に放っている。「カウンティン・オン・ア・ミラクル」ではタイトルにあるように奇跡を待つ歌と言えるが、それだけではない。

There ain't no storybook story

There's no never-ending song
Our happily ever after Darlin'
Forever come and gone

.....

Our love's this dust beneath my feet
Just this dust beneath my feet

確かに上記のような歌詞は、失われたものは決して戻ってこないという深い喪失感を表している。しかし、その悲しみに無抵抗なまま屈するのではなく、何とか乗り越えていこうとする意志が感じられる歌詞が続く。

If I'm gonna live
I'll lift my life
Darlin' to you

「ザ・ライジング」という曲、及びCDのタイトルにある“rise”と同様に、ここでは“lift”という単語が使用され、空虚な精神状態から回復してゆこうというメッセージを読みとれる。

次の「イントゥ・ザ・ファイヤー」は、ABCテレビでのテッド・コッペル (Ted Koppel) とのインタビューで彼が認めていたように、9.11後に作曲した曲では最も早くから取りかかっている。世界貿易センタービルに消火に入った消防士の遺族の視点から歌っている。ちなみに、「ザ・ライジング」は、この曲とは逆に世界貿易センタービルに消火活動に向かい、そしてたぶん死ぬであろう消防士の立場から描かれた曲である。「イントゥ・ザ・ファイヤー」のサビは以下のようなフレーズのリフレインである。

May your strength give us strength
May your faith give us faith
May your hope give us hope
May your love give us love

“May your～” と何度も繰り返されることから分かるように、祈りがテーマである。これほどの深い祈りのこもったある種の鎮魂歌を歌わざるをえないほど

までに、スプリングスティーンの心はこの事件に共鳴していた。

「マイ・シティ・オブ・ルーインズ」は、同様に祈りの気持ちが強く現れている。もちろん歌詞は一部変更されているらしいが、9.11以前に書かれていた2曲のうちの一つである。自らの地元であるニュー・ジャージーの荒廃ぶりを嘆いて作ったとされている。この曲は、事件直後に行われた America: A Tribute to Heroes というチャリティ番組でも披露されていた曲だが、まるで今回の事件のために書かれていた曲ではないかと思わせるような内容である。

“Come on, rise up”というリフレインとともに、以下のようなフレーズが続く。

Now with these hands
With these hands, With these hands
With these hands, I pray Lord
With these hands, With these hands
I pray for the strength, Lord
With these hands, With these hands
I pray for the faith, Lord
With these hands, With these hands
We pray for your love, Lord
With these hands, With these hands
Pray for the strength, Lord
With these hands, With these hands
We pray for your love, Lord
With these hands, With these hands
Pray for your faith, Lord
With these hands, With these hands
I pray for the strength, Lord
With these hands, With these hands

ゴスペル風の曲想とあいまって、この事件によって大きな心の痛手を受けたアメリカ国民への回復を祈る励ましのメッセージをこの曲に託している。

このようなテーマ1に属する歌詞をみていくと、事件の痛手から立ち直り、共に祈り、乗り越えて前進していこうという彼の思いを読み取ることができる。アメリカへ、アメリカ人へ向けて、自らの愛する国の惨状を見て、やむにやまれぬ思いからこれらの曲を作っていたのではないか、ということが容易に推察されるし、彼のアメリカへの深い愛情を伺うことができる。

しかし、このテーマ1だけでこのアルバムが構成されていないのが、スプリングスティーンらしいところである。もし、テーマ1に属する内容の歌詞だけでこの『ザ・ライジング』が構成されていれば、発表時期が時期だけに、たとえ本人にそういう意図が全くなかったとしても大衆受けをねらったある意味ひょっとしてコマーシャルイズムが強い作品になりかねないし、事実そういう批判もあった。先ほども述べたように、このアルバムでスプリングスティーンは深い祈りの気持ちや、アメリカへの愛情など、彼のアメリカやアメリカ国民への思いをつづっている。さらに、スプリングスティーンらしく、様々な主人公を曲毎に設定して物語を作り出してもいる。そういう意味において、テーマ1の曲だけでも間違いなく優れたアルバムと言えるが、当時の状況を考えると、事件後にアメリカ国歌を含むアルバムを発表した人気女性カントリー歌手リアン・ライムス（LeAnn Rimes）、同様にアメリカ国歌をシングルで発表したホイットニー・ヒューストン（Whitney Houston）などの歌手とあまり差はなくなってしまう。さらに言えば彼女らよりもはるかに愛国主義的な色彩の強い作品を発表したトウビー・ケース（Toby Keith）であるとか、ダリル・ウォーリー（Darryl Worley）といった男性カントリー系の歌手と大差ないものとしてリスナーに、アメリカ国民に受け取られてしまう可能性をもはらんでいた²。

テーマ1に含まれる曲はこれまでの議論で分かるように、傷付いたアメリカとその国民を強く思う気持ちはあるもののそれほど愛国主義的だとは言えない。しかし、これらの曲だけを取り出せば、スプリングスティーンの本意では当然ないだろうがそのような誤解をうける可能性は充分にある³。逆に言えば、それほどまでにスプリングスティーンの想いは強いと言えるし、また、アメリ

か国民の事件によるショックの度合いも推し量ることができる。

スプリングスティーンはそのような誤解を巧妙に回避するようにこの『ザ・ライジング』というアルバムを製作している。1984年発表の『ボーン・イン・ザ・USA (*Born in the USA*)』はそのタイトルと星条旗をあしらったアルバムジャケットから大きな誤解を招いた。実際はベトナム戦争帰還兵のことを歌った歌で、“Born in the USA”という歌詞も誇らしげに歌っているのではなくかなりのアイロニーがこめられている⁴。今回の『ザ・ライジング』のジャケットにはフォーカスのあっていない自分自身の写真を用いている。ホイットニー・ヒューストンやリアン・ライムス、ダリル・ウォーリーなどのジャケットにはどれも星条旗が描かれているのとは対照的である。これらの作品以外にも多くの愛国主義的な内容のCDが発表されたが、その多くは星条旗や自由の女神や花火などアメリカ人に愛国心を呼び起こさせるようなものをジャケットにあしらっている。さらに、『ザ・ライジング』には後述するテーマ2の内容を歌った曲があるので、実際の印象・作品の質感は先程述べた歌手達とは大きく異なっている。

2. 密接な接触とアメリカの責任

テーマ2に含まれる歌詞は表面上何気ない恋の歌のようでも、アメリカとイスラム圏諸国との断絶というテーマを扱っている。そして、文化の断絶をただ嘆くという段階にとどまるのではなく、お互いの違いを認めあいながら、より近づいていこうという強烈な意思を感じ取ることが出来る。テーマ1だけにおさまらないスプリングスティーンの強い思いがこのテーマ2に感じられる。

「ロンサム・デイ」はスプリングスティーンが *Uncut* 誌でのインタビューで明言している通り表向きは恋の歌である。一連目を読めば完全に恋の歌、または失恋の歌、と読めてしまうのも無理はないが、苦悩するアメリカを歌い込んでいると読むことが可能だ。

Baby once I thought I knew

スプリングスティーンのアメリカ：9.11、引き裂かれたアメリカン・マインド (9.11後のアメリカのミュージック・シーン1) (加藤隆治)

Everything I needed to know about you
Your sweet whisper, your tender touch
I didn't really know that much
Joke's on me, it's gonna be okay
If I can just get through this lonesome day
Lonesome day

明らかに、自分の恋の相手をよく知らなかったということが歌われている。しかし、9.11という文脈の中におきかえて、以降の連を読み込んでいくと全く違う相が浮かび上がってくる。次の2連目をでそれははっきりと分かる。

Hell's brewing, dark sun's on the rise
This storm will blow through, by and by
House is on fire, vipers in the grass
Little revenge and this too shall pass
This too shall pass, darling
Yeah I'm gonna pray

ここでは、全く恋の歌にはふさわしくない情景が描かれている。どちらかと言うと9.11、ないしはその後のアメリカによるアフガン侵攻を思わせる描写である。次の3連目ではさらに明確に恋の歌とはかけ離れた状況が歌われる。

Better ask questions before you shoot
Deceit and betrayal's a bitter fruit
It's hard to swallow come time to pay
That taste on your tongue don't easily slip away
Thy kingdom come, I'm gonna find my way
Yeah, through this lonesome day

例えば、「撃つ前に問題を考えるべきだ」「偽りと裏切りの苦い果実を飲み込むのは大変だが、償いをするときだ。舌の上のその味は簡単に消えはしない」と歌っているが、恋の場面には全くもって似つかわしくない。

では、1連目2連目3連目をどのように結びつけて考えることができるのだ

ろうか。アメリカとイスラム圏の国々の置かれた現状を歌っていると解釈することでうまく全体の整合性がとれる。3連目は「今、アメリカが報いを受けているが、それを受入れ、相手を攻撃する前に何が問題なのかを考えるべきなのだ」ということを歌っていると考えれば、恋を歌ったように読める1連目の裏の意味が見えてくる。つまり、相手というのは単に恋の相手ではなく、別の国＝イラクなどのイスラムの国々のことをよく知らなかったということを歌っていると解釈できる。戦争反対という立場を鮮明に表し、アメリカにこそ問題があり、その問題点を解決することから出発しなくてはならないというスプリングスティーンのアメリカに対する意見はかなり厳しい。しかし、引用の最後の2行から現在アメリカはロンサム・デイを過ごしているが、いつかは乗り越えられる、この危機的状態もいつかは終わるのだという主張も読み取れるので、スプリングスティーンは未来に対してポジティブな見解も持ち続けていることが分かる。こういった楽観主義的なあたりはアメリカ人的と言える。

次に「ワールズ・アパート」の歌詞をみていく。まずもって、一瞬、ピーター・ガブリエルかと思うくらいエスニック色が濃いアラブ風の曲調に驚かされる。スプリングスティーンと言えは良くも悪くもロックンロール的あるいはフォーク的な曲調が大半で、このような曲調は非常に珍しいが、この辺りにもスプリングスティーンを意識が反映されていると考えられる。

I hold you in my arms, that's when it starts

I seek faith in you kiss, and comfort in your heart

I taste the seed upon your lips, lay my tongue upon your scars

But when I look into your eyes, we stand worlds apart

どんなに近くにしようと、二人の住む世界は違うという内容なので、やはり表面上は恋愛の歌と取れなくもない。しかし、アラブ風曲調と9.11に関連したアルバム中の曲ということ意識すれば、アメリカとアラブ諸国の間の断絶を示していると考えるのは容易である。そして、この状況にペシミスティックになることなく、互いの違いを認め、さらに乗り越えていこうとする強い意志が感じられる。

Let's throw the truth away, we'll find it in this kiss
In your skin upon my skin, in the beating of our hearts
May the living let us in, before the dead tear us apart
(訳)

真理だけでは十分でないときもある
時には今のように、十分すぎることもある
そんな真理は投げ捨て、キスの中に別の真理を見出そう
あなたの肌をぼくの肌に重ね、ふたりの鼓動を合わせて
生きている者たちがぼくたちを迎え入れてくれるように
死んだ者達がぼくたちを引き裂いてしまう前に
(訳は全て三浦久氏の訳を使用)

現在のイスラム教対キリスト教という宗教戦争的な状況において、宗教的な真理は問題解決には不十分で、実はそれより必要なのは愛という真理だということを書いて歌っている（とは言ってもスプリングスティーンは「宗教を捨てろ」とか「宗教は必要ない」ということを言っているのではないが）。このあたりは今回のアルバムで「キス」などのより密接な人と人とのつながりを持とうという主張と絡んでいる。さらに、過去には不幸なことがあり、多くの死者も出ているが、それを乗り越えていこうと高らかに主張している。さらに、以下のような歌詞が続く。

We'll let blood build a bridge, over mountains draped in stars
I'll meet you on the ridge, between these worlds apart
We've got this moment now to live, then it's all dust and dark
Let love give what it gives
Let's let love give what it gives
(訳)

血によって、星空に覆われた山々に橋をかけよう
ふたつの違う世界の間で会おう
生きることができるのは、闇と闇の間のわずかな瞬間だけ

愛に、与えるものを与えさせよう

共に、愛に、与える者を与えさせよう

分断された二つの世界に橋を架けようという内容だが、“I’ll meet you on the bridge, between these worlds apart” と歌っているように、決してお互いを無理に理解し合うというのではなく、違いを認め合いながら橋を架けていこうということを歌っている。このような内容の歌だと分かるとスプリングステーンがあえてこのアラブ風曲調を選んだということの意味も我々リスナーにはっきりと響いてくる。

「ファーザー・オン・アップ・ザ・ロード」も同様に分断された世界の理解を説いている。まず、明らかに戦闘直後の生々しさが伝わる状況が描かれる (“Where the gun is cocked, and the bullet’s cold/Where the miles are marked in blood and gold”)。しかし、それでもそこで会おうと歌っている (“I’ll meet you further on up the road”)。そして、“One sunny mornin’ we’ll rise I know” というポジティブなイメージでしめくくられる。

「レッツ・ビー・フレンズ」は、まずもって、そのタイトルがはっきりと曲のメッセージを物語っている。ただし、これまで分析してきた他の曲と同じ文脈で読んでいくと、当然ながらより深みのある内容が浮かび上がってくる。

I know we’re different you and me

Get a different way of walkin’

The time has come to let the past be history

Yeah, if we could just start talkin’

ここには、まず、お互いの違いを認め合おうという意識が明白に示されている。だから相手を攻撃するのではなく、過去に起きた悲惨な歴史はいったん脇に置いて話し合おうという態度をみることが出来る。この詞も「友達になろう」という浅いレベルでの表面的な解釈が可能だが、やはりアメリカとイスラム諸国の関係を歌っていると考えられる。

Don’t know when this chance might come again

Good times got a way of comin’ to an end

Don't know when this chance might come again

Good times got a way of slippin' a-way

Let's be friends, baby let's be friends

(訳)

この機会はいつくるかわからない

好機はすぐに終わってしまうものだから

この機会が次にいつくるかわからない

好機はすぐにすり抜けてしまうものだから

歌詞から判断すると、今が、この混迷を深めている時代こそが話し合う好機なのだと言っている。この9.11後の、アフガン戦争、イラク侵攻というこの時期を逃すな、ということである。また、“skin to skin”と歌われているように、やはり肌と肌が触れ合うような密接な接触こそが友となることだとも述べている。

「パラダイス」という曲は、このアルバム中で最も特異な曲である。最大の特徴は1・2連、3・4連、5・6連でそれぞれ話者が異なっているという点である。1・2連では、自爆テロを行う女性が話者となっている。

Where the river runs to black

I take the schoolbooks from your pack

Plastics, wire and your kiss

The breath of eternity on your lips

In the crowded marketplace

I drift from face to face

I hold my breath and close my eyes

I hold my breath and close my eyes

And I wait for paradise

And I wait for paradise

従って、この“wire”や“plastic”というのは明らかに爆弾を意味していると

考えることができる。3・4連では、ペンタゴンのテロの犠牲者の遺族（女性）である。

The Virginia hills have gone to brown
Another day, another sun goin' down
I visit you in another dream
I visit you in another dream

I reach and feel your hair
Your smell lingers in the air
I brush your cheek with my fingertips
I taste the void upon your lips
And I wait for paradise
And I wait for paradise

歌詞中の Virginia はペンタゴン所在地と考えられる。5・6連では、愛する人が死んでしまい、入水自殺を図る人（女性）が話者となっている。

I search for you on the other side
Where the river runs clean and wide
Up to my heart the waters rise
Up to my heart the waters rise

I sink 'neath the river cool and clear
Drifting down I disappear
I see you on the other side
I search for the peace in your eyes
But they're as empty as paradise
They're as empty as paradise

この三つ目の話者は最後に “I break above the waves/I feel the sun upon my face” という2行が続くのでは死なずに生きることを選択しているようである。

このような流れを読んでいくと、“paradise”という単語をキーワードにしなが
ら、それぞれ立場の人間の生と死が描かれているのが分かる。スプリングス
ティーンは鋭い洞察力で、自爆テロを行う人とそういうテロによって犠牲に
なった人の家族という両方の立場を、どちらかに加担することなく描き出す。
特に、自爆テロを行う人間も同じようにパラダイスを待っているというのは他
のミュージシャンにはなかなか描くことの出来ない世界と言えるし、9.11 後の
アメリカでこのような歌詞を世に問うには尋常でない勇気が必要だろう。さら
に、この歌詞は、自殺を思いとどまり生を選ぶ話者が視点の連を加えることで、
生の重みを表現することに成功している。

スプリングスティーンは決して自爆テロを肯定している訳ではないが、自爆
テロを行おうとする人間の意識の中に入り込むことで、その人の生き方や考え
方を理解しようとしている。このあたりは、アメリカ人でありながらタリバン
兵となり、アフガン紛争で祖国アメリカと戦い捕虜となるジョン・ウォーカー
(John Walker Lindh) のことを歌った「ジョン・ウォーカー・ブルース “John
Walker’s Blues”」の作者であるスティーブ・アールとの共通点を見い出せる。
共にある意味 9.11 後にはタブーと言える領域に足を踏み入れている⁵。

「エンプティ・スカイ」は表面的には、単純に事件後の心情を歌った歌である。
朝起きるとあったはずのツイン・タワーはなく、見えていたのは “empty sky”
だけだったという喪失感を表現している。

Blood on the streets
Blood flowin’ down
I hear the blood of my blood
Cryin’ from the ground

“Empty Sky”というリフレインと共に、明らかに事件を思わせるような描写が
ある。これだけでも、事件後の心情を描いたよくできた歌と言えるが、しかし、
この歌詞にはそれだけでは済まされない異質な連が差し挟まれる。それが以下
の部分である。

On the plains of Jordan

I cut my bow from the wood

Of this tree of evil

Of this tree of good

(訳)

ヨルダンの平原で

木から弓を作った

悪の木から

善の木から

ここは明らかにキリスト教的な色合いが濃く、かつそれに基づきながら様々な解釈を許す曖昧な表現で書かれている。「善悪の木」そして「ヨルダンの低地(平原)」という聖書に関するフレーズが出てくる。

まず、聖書に関連する描写とそれの基づく事実を確認しておく必要がある。「善悪の木」とは、エデンの園に生えていて、アダムとイブが蛇にそそのかされその木に生えている果実を食べてしまうという聖書の話に登場する。そして、“the plains of Jordan” は、通常「ヨルダンの平原」または「ヨルダンの低地」と日本語に翻訳される。その土地は、あのソドムとゴモラがあった場所である。つまりは、繁栄を極めていたが背徳の地でもある。そして、ソドムとゴモラは背徳の報いを受けて滅ぼされるのである。

歌詞では、「善悪の木」から bow (弓)、つまり武器をつくと描写されている。これを聖書と重ねて考えると、「善悪を知る木」からはとってはならないと言われていたのに取って食べてしまうように、武器も本来は作ってはいけなかった、または、使用してはいけなかったということを意図していると考えられる。また、“Of this tree of evil/Of this tree of good” という表現になっているように、武器も善となり悪ともなりうるということを述べているととることができる。言い換えれば、アメリカは武器を作っているがそれは良いことにも使用されるが、悪にもなりうるということを言っているように解釈できる。

一方、「ヨルダンの低地」に関しては「善悪の木」と合わせて以下のように考えられる。繁栄を極めているヨルダンの低地、言い換えればアメリカにはエデ

スプリングスティーンのアメリカ：9.11、引き裂かれたアメリカン・マインド (9.11後のアメリカのミュージック・シーン1) (加藤隆治)

ンの園に生えていた善悪を知る木が生えている。その木から果実をもいで食べるごとく弓(つまり武器)をつくった。そして、“I”という一人称でこの曲が書かれているということは、その武器を作ったのは「私」であり、その私がつくった武器によってアメリカは攻撃され、“empty sky”が出来てしまったという解釈が可能となる。他の曲にも現れていたように、自分達やアメリカにこそ問題がありその報いで今回の9.11が起きたというスプリングスティーンの主張がここでも繰り返されている。

この解釈をさらに押し進めていくことも出来る。「ヨルダンの低地」には繁栄していたものの背徳に染まったソドムとゴモラがあり、そして、その背徳の報いによりソドムとゴモラは滅ぼされる。つまり、現在のアメリカは背徳に満ちあふれ、その報いで攻撃を受けたという解釈が浮かび上がってくる。ここまでスプリングスティーンが意図していたのかどうか定かではないが、少なくとも先にも書いたように曖昧な表現に終始しているのでこのような解釈も可能になる。

また、「ヨルダンの低地」は、当然ながら現在のヨルダンのことなので、当然アラブの国々のことを指しているということも考えられる。そうすると、アラブの国にアメリカ自らが武器を作りもたらしたということ、言い換えると、フセインやビン・ラディンらに肩入れし武器供与をしていたのは実はアメリカであるという事実を思い浮かべることすら可能になる。その武器によって自らが攻撃を受けたのは皮肉以外の何者でもない⁷。

いずれの解釈にせよ、今回の9.11及びその後の展開におけるアメリカの責任を歌い込んでいるのは間違いない。スプリングスティーン以外のミュージシャンの曲では、アメリカ政府や企業、またはブッシュ政権を批判するだけの論調が多いが、一アメリカ人として自らの責任の所在を明らかにしているスプリングスティーンは、やはりアメリカの良心を背負ったシンガーと言える。そういう意味において、『ザ・ライジング』はひじょうに政治的な含みをもったアルバムである⁸。

テーマ2は歌詞を丹念に読んでいけば割と簡単に読みとれるはずだが、アメ

リカでの『ザ・ライジング』に関するレビューを読む限り、スプリングスティーンのファン、または音楽評論家であろうとなかろうと、そのほとんどがテーマ2のメッセージを読みとっていない。いや、読みとりたくはない、もしくは、スプリングスティーンにはそのような内容は歌って欲しくはない、そんな内容の歌はスティーヴ・アールだけにしてほしい、スプリングスティーンにはそのような歌は期待していない、という気持ちがアメリカ人のどこかあるのではないだろうか⁹。筆者にそのように感じられる理由は、テーマ2の内包するメッセージがあまりにも強い主張を含んでいるからである。

結

本稿での歌詞の分析で分かるように、スプリングスティーンをブッシュ擁護派とか戦争賛成派とか愛国主義者に色分けをすることは出来ない。彼は、アメリカという国を愛しそして信じてもいるが、その信じているはずのアメリカには大きな問題があり、そのせいで今回の事件が起きたという認識を持っている。だからと言って、一般的な反戦派とは違い、単に声高に政府やブッシュ大統領、石油関連の企業やコングロマリットなどを攻撃する他のミュージシャンの態度とも違い自らの責任を明確にしている。『ザ・ライジング』というアルバムの特質上、スプリングスティーンは表面上どちらかの派に属しているように見えなくもないが、実はどちらにも属さずに、その二つの派の間で微妙な位置でバランスを保っているということが分かる。9.11以降アメリカの国論が二分され解決がつかない泥沼状態に陥っていることを反映しているかのように、スプリングスティーンの中にも何かアメリカに対してはっきりしないどっちつかずの状況がこのアルバム制作中にはあったのではないか。それが、『ザ・ライジング』でのジャケットのフォーカスのあっていない自分の写真にもつながっていると考えることはあながち間違っていないだろう。

『ザ・ライジング』以降、スプリングスティーンは対アメリカ政府、対ブッシュ政権への対決姿勢を強めていく。そして、さらに2004年の大統領選挙における

民主党ケリー候補への応援という直接行動へとつながっていく。『ザ・ライジング』におけるバランスを重視した態度からは明らかに一步踏み出している。これは『ザ・ライジング』発表の時期よりもアメリカ国内での状況やイラクでの戦況が悪化していたという点のみならず、リスナーの『ザ・ライジング』の受け取り方への彼自身の不満もあったのではないかと¹⁰。

「愛国」の空気が充満するアメリカにおいて、ミュージシャンが政治的な発言をしたり、大統領批判をするというのは、ミュージシャンにとって大きな賭けと言える。激しいバッシングを受けたり、ファンの離反を招く危険性があるからである。事実、保守的な層に人気の高いカントリーを演奏する人気グループ、ディキシー・チックスのメンバーたちは、反ブッシュ色を明確にした発言をしたため不買運動、ラジオ局でのオンエア拒否など強烈なバッシングにさらされ、その挙げ句生命の危機すら感じることもあったという。スプリングスティーンに関してはそのようなことはリポートされていないので表立った激しいバッシングは受けてないようだが、それでも多くのファンが彼の元を離れたことは事実である¹¹。彼だけでなく多くのミュージシャンたちがミュージシャン生命をかけてまでアメリカ国民に対し様々なメッセージを発信し続けなければならないほど、現在のアメリカは保守化・右傾化しているということを我々は意識すべきだろう。

Notes

- ¹ スプリングスティーンの歌詞を翻訳した三浦久は「ナッシング・マン」での“the pearl and silver”は銃のことであると指摘している。ただし、この曲は9.11前に書かれているものなので、9.11と絡めずにも読めるが、同様に事件前に書かれた“My City of Ruins”と同じで、9.11という文脈から読む方が圧倒的に面白く深みが増す。また、“How my brave young life/Was forever changed/In a misty cloud of pink vapor”という歌詞を読むと、明らかに9.11を指しているのが分かる。Uncut誌とのインタビューでスプリン

グスティーンは “apparently a vignette of a small-town character who becomes a local hero after some unspecified act of heroism” と説明している。

- 2 ダリル・ウォーリーは、「事件のことを忘れてしまったのかい？」と問いかける “Have You Forgotten” を発表し、トウビー・キースは “Courtesy of the Red, White and Blue (The Angry American)” を発表している。後者はタイトルが全てを物語っているが、アメリカにたてつく痛い目にあうぜ、という内容の歌詞である。
- 3 その証拠に、彼の『ザ・ライジング』は愛国主義的な主張をするウェブ・サイトでも「愛国的なアルバム」として紹介されている。例えば、Patriotic & Country Music... *Born and bred in the U.S.A.* というウェブ・ページの「愛国的な曲のリスト (patriotic songs list)」に「ザ・ライジング」がリストアップされている (<http://www.countrygoldusa.com/index.html>)。また、Top 10 Patriotic Music Albums というページでは、『ザ・ライジング』が第二位にランキングされている (<http://politicalhumor.about.com/cs/toppicks/tp/aatpmusic.htm>)。さらに、スプリングスティーン自身も前述したテレビ番組 (America: A Tribute to Heroes) に出演しているし、彼の曲が愛国的色合いの強い編集 CD に収録されてもいる。例えば、2001年10月16日にリリースされた *God Bless America* という編集 CD にはカントリー歌手リー・グリーンウッド (Lee Greenwood) の歌う “God Bless the USA” などと共に、スプリングスティーン の “Land of Hope and Dreams” が収録されている。
- 4 確かに “Born in the USA” と拳を突き上げ連呼している姿をみるとアメリカ讃歌のように思えてしまうが実際は全く違う。しかし「ボーン・イン・ザ・USA」いまだに愛国的な歌だと勘違いされている。 *Tribute to America* や *Patriotic Vol.1 Karaoke Music* という愛国的な歌を集めたカラオケ CD にも収録されているし、上記注にあるようなサイト (例えば、www.northtexasdj.com/patriotic.html を参照) でもやはり愛国的な歌としてリストアップされている。ちなみに、Patriotic Karaoke Music のシリーズ中の別の CD では、

前述のトウビー・ケースやダリル・ウォーリーの曲も収録されている。

- 5 両曲ともテロリスト側の視点に立った歌詞である。愛国的な空気が現在よりもはるかに強かった 2002 年当時にそのような内容の歌詞を歌うということは、歌手生命を脅かす危険を伴うということの意味する。他者を、特にテロを行う「敵」を理解しようとする姿勢は黙殺されてしまうかバッシングの対象となりかねないからである。
- 6 「善悪の木」は以下のように聖書に書かれている。

主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置かれた。また主なる神は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。

.....

主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。主なる神はその人に命じて言われた、「あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」。

また、「ヨルダンの低地」は以下のように描かれている。

ロトが目を上げてヨルダンの低地をあまねく見わたすと、主がソドムとゴモラを滅ばされる前であったから、ゾアルまで主の園のように、またエジプトの地のように、すみずみまでよく潤っていた。そこでロトはヨルダンの低地をことごとく選び取って東に移った。こうして彼らは互いに別れた。アブラムはカナンの地に住んだが、ロトは低地に町々に住み、天幕をソドムに移した。ソドムの人々は悪く、主に対して、はなはだしい罪人であった。

- 7 このアルバムのレビュー等を読んでも、「ヨルダンの低地」や「善悪の木」について触れてはいても詳細に論じているものはなかった。このキーワードを素通りしてしまうと単なる「喪失感」を扱った歌になってしまう。三浦久氏

は「『ザ・ライジング』全15曲に対するぼくの大いなる誤訳、大いなる誤読」で、「この4行がこの歌を理解する鍵であるように思われる。ひょっとしたら、この歌ばかりでなく、このアルバムを理解する上で重要な4行である」と感じ、「エデンの園に生えていた一本の木から作られた弓から射られた矢が、時空を超えて、ハイジャックされて旅客機となって、ツインタワーに突き刺さったのである。」と解釈している。

- ⁸ タイム誌で Josh Tyrangiel は “What’s missing on *The Rising* is politics.” と書いているが、歌詞の内容を精査すれば、それとは逆にこのアルバムは政治性が強いことが分かる。
- ⁹ メディアでは「パラダイス」と「ジョン・ウォーカー・ブルース」は比較されることが多かった。しかし、発表後のマスコミの対応を見ると大きな差がある。二人の比較をした Don Hazen によると、スティーブ・アールは大きな反響を巻き起こし “America’s most reviled popular musician” とまで呼ばれ不買運動すら起きた。一方、スプリングスティーンの場合には、そのような論調が起きなかったのは特筆に値するだろう。これはアールの歌詞にキリスト教徒の反感を買うような歌詞があるし、彼自身常々政治的な発言を繰り返してきたから、と言うだけでは説明されない。確かに、多くのレビューなどでスプリングスティーンの「パラダイス」は自爆テロ犯の視点に立っているという解説はあるが、アールようには非難されていない。Hazen は “Tragically, we live in a black-and-white world, one that requires a precarious balance of heroes and scapegoats.” と説明しているが、その解釈には一理ある。

例えば、2004年ゴア元副大統領の声明をスプリングスティーンが自身のホームページに載せた後、それに対するファンの反応からスプリングスティーンにファンが何を望んでいるのか浮かび上がってくる。以下の引用は、*Backstreets: The Boss Magazine* という彼のファンの間では有名なファンジンでの読者からのレターの欄で紹介されたものである。

Bruce Springsteen’s reprinting of Al Gore’s May 26th NYU

speech on his official website, and his endorsement of the invidious and confounded views expressed in that speech, is a source of great embarrassment of many of his loyal fans. Never before have I been so disappointed in someone who I otherwise hold in such high regard. (Dick Bourne)

これを読むとファンが民主党寄りかつ反ブッシュ的な言動をするスプリングスティーンにいかにも失望しているか分かる。もう一つの読者の声を紹介しよう。こちらはスプリングスティーンの言動に理解を示すファンの投書である。

I get confused and annoyed when I read letters to editors or chat room posts complaining about how liberal Bruce has become. I always find myself wondering, Have they been listening to the same Bruce as I have for all of these years? (Julie Rabideau)

これらの投書からみえてくるのは、ファンによってスプリングスティーンは anti-Bush にも pro-Bush に取ることが出来た、そしてそれが少なくとも『ザ・ライジング』の時点までは続いていたということである。

- ¹⁰ しかし、拙著「分断されたアメリカと今後：Toby Keith と System of a Down と Bruce Springsteen の作品から読む」において書いたように、スプリングスティーンは、ブッシュ政権を擁護するトウビー・ケースや逆に徹底批判するシステム・オブ・ア・ダウンらとは異なる中間派という微妙な立ち位置をキープし続けている。
- ¹¹ 一連の言動によりスプリングスティーンは多くのファンを失ったのはまぎれもない事実である。例えば、前述の *Backstreets* 同号での別の読者はスプリングスティーンが参加したケリー候補応援のための Vote for Change ツアーに関して “I’m boycotting Bruce Springsteen, and I’m burning everything I ever collected.”（4）と反応している。さらに、“I cannot support these liberals who have no idea of what freedom is, yet they wear flags on stage” (S. Cote) と手厳しくコンサート参加者も非難している。

Works Cited

- Bourne, Dick. Letter. *Backstreets: The Boss Magazine*. 80 (2004): 4
- Cote, S. *Backstreets: The Boss Magazine*. 80 (2004): 4
- Earle, Steve. "John Walker's Blues." *Jerusalem*. Sony Music, 2002.
- Hazen, Don. "Bruce Springsteen and Steve Earle: Which Has Turned Anguish into Art?" *AlterNet*. 2002. Aug 12. <<http://www.alternet.org/story/13823/>>.
- Keith, Toby. "Courtesy of the Red, White and Blue (The Angry America)." *Unleashed*. Dreamworks Records Nashville, 2002.
- 三浦久「『ザ・ライジング』全15曲に対するぼくの大いなる誤訳, 大いなる誤読」"Bruce Springsteen *The Rising* Special." <<http://www.sonymusic.co.jp/Music/International/Special/BruceSpringsteen/therising.html>>.
- Rabideau, Julie. Letter. *Backstreets: The Boss Magazine*. 79 (2004): 4
- Springsteen, Bruce. "Devils and Dust." *Devils and Dust*. Sony Music, 2005.
- . interview with Adam Sweeting. "Into the Fire." *Uncut*. Sept. 2002. <<http://www.angelfire.com/rock3/jabongo/articles/uncut0902.html>>.
- . Interview with Ted Koppel. "Re-Born in the USA: Bruce Springsteen Discusses Sept. 11 and His New Album." ABC. *Nightline*. 2002. July 30.
- . *The Rising*. Sony Music, 2002.
- Tyrangiel, Josh. "Reborn in the USA." *Time: Arts—Music*. July 27. 2002. <<http://www.time.com/time/covers/1101020805/story3.html>>.
- Worley, Darryl. "Have You Forgotten?" *Have You Forgotten*. Dreamworks Records Nashville, 2003.